



普及版

吉川英治代表作

八百年の昔、私たち庶民の生きる
苦しみを我がこととして共に苦悩
してくれた人、親鸞——この人と
の触れあいは今日なお新鮮な感動
を以て人間性の回復を語りかけ安
易な日常への反省を迫ってくる。
人間いかに生くべきかを問う名著

吉川英治

親鸞

中



吉川英治

親しん
鸞らん

中

六興出版

親鸞 中巻 (全3巻) 0093-00602-9216

昭和45年2月9日 初版発行

昭和60年3月30日 第24刷発行

著者 吉川英治

発行者 賀來壽一

発行所 株式会社 六興出版

東京都文京区水道2-9-2 〒112

電話東京(943)3431 振替東京 1-92448

印刷 多田印刷株式会社

製本 株式会社明泉堂

落丁本, 乱丁本はお取替えいたします

© 1977 YOSHIKAWA EIJI KOKUMINBUNKA SHINKOKAI

Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

中巻 目次

〈女人篇〉

風水流転(5)——時雨の罪(7)——きらら月夜(23)——牡丹の使い(39)
峰阿弥がたり(44)——白磁を砕く(57)——霧の扉(64)

〈大盗篇〉

あられ(73)——手長猿(84)——九十九夜(94)——離山(104)

〈恋愛篇〉

門(115)——吉水夜話(123)——屋根の下(126)——岡崎の家(134)——火焰舞い
(141)——春信佳便(152)

〈同車篇〉

熊野犬(173)——不退の聲(182)——浄土万華(192)

〈法敵篇〉

氷柱の下(205)——春雷(211)——宣戦(223)——沙門の妻(228)——
鰲を焼く(240)
——風やまず(254)

女
人
篇

風 水 流 転

一

暗黒の大蔵の中から光のなかへ、何ものかを自分はつかんで出たと信じた。五ヵ月ぶりで一切経の中から世間へ出た時の範宴のよろこびは、大きな知識と開悟とに満たされて、肋骨のふくらむほどであった。

(もう何ものにも迷うまい) 彼は、信念した。

(もう何ものにも挫けまい) 彼は足を踏みしめた。

そして心ひそかに、我れこの世を救はん

の釈尊の信願をもって自分の信願とし、雪の比叡へ三度目ののぼったのである。

仏祖釈迦如来は、大悟の眼をひらいて雪山を下りたという。彼は、新しい知識に信をかためて伝統の法城へ勇躍してのぼってゆく。

どのくらいな心力と体力のあるものか、範宴は、不死身

のように死ななかった。骨と皮ばかりになって、しかも、麓への道さえ塞がれた雪の日に、

『範宴じゃ、今帰った——』と、一乗院の玄関へふいに立った彼のすがたを迎えて、覚明も性善坊も、

『あ……』と驚いたほどであった。

休養というような日はそれからも範宴には一日もなかった。おそろしい金剛心である、彼はその冬を華嚴經の研究のなかに没頭して、覚明や性善坊と、炉辺に手をかざして話に耽ることすらない。

そうした範宴の日々の生活をながめて、覚明は或る時、しみじみと、

『命がけということは、武士の仕事ばかりと想っていたが、どうして、一人の凡人が、一人の僧といわれるまでには、戦い以上の血みどろなものじゃ』と、心から頭を下げるのであった。

翌年の五月の下旬であった。難波から京都の附近一帯にわたって、めずらしい大風がふいて、ちょうど、五月雨あげくなので、河水は都へあふれ、難波あたりは高潮が陸へあがつて、無数の民戸が海へ攫われてしまった。

そういう後には必ず早がつづくもので、疫病が流行り出すと、たちまち、部落も駅路も、病人のうめきにみちてしまった。都は最もひどかった。官では、施薬院をひらいて、薬師だの上達部だのが、薬を施したり、また諸寺院で悪病神を追い退ける祈禱などをして、民戸の各戸口へ、赤い護符などを貼りつけてしまったけれど、早にこぼれ雨ほどのききめもない。

大さえ骨ばかりになって、ひよろひよろあるいている。町には、行路病者の死骸が、乾物みたいにからからになって捨てられてあったり、まだ息のある病人の着物を剝いで盗んでゆく非道な人間だのが横行していた。

突然、召状があつて、範宴は叡山を下り、御所へ行くあいだの辻々で、そういう酸鼻なものを、幾つも目撃した。(ああ、たれかこの苦患を救うべき) 若い範宴のちかいは、心の底にたぎってきた。

二

なんのお召であらうか。

庁の中務省へゆくまでは範宴にも分らなかつたが、出

頭してみると、意外にも、奏聞によつて、範宴を少僧都の位に任じ、東山の聖光院門跡に補せらる——というお沙汰であつた。叡山では、またしても、

『あれが、少僧都に?』と、わざとらしく囁いたり、

『二十五歳で、聖光院の門跡とは、破格なことだ。……やはり引き人がよいか、門閥がなくては、出世がおそい』などと羨望しあつた。

彼等の眼には、位階が僧の最大な目標であつた。さもないければ勢力を持つかである。そして常に、武家や権門と対峙することを忘れない。

たれが奏聞したのか、範宴は、それにもこれにも、無関心のように見える。どんな毀誉褒貶もかれの顔いろには無価値なものにみえた。ただ、さしもの衆口も近ごろは範宴の修行を認めないではいられなくなつたことである。一つの事がおこると、それについて一時はなんのかの蠅のように騒ぎたてても、結局は黙つてしまう。心の底では十分にもう範宴の存在が偉なるものに見えて来て、威飾をすら感ずるのであるが、小人の常として、それを真つ直にいうことが出来ないで、彼等は彼等自身の嫉視と焦躁でなやんで

いるといったかたちなのである。

翌年秋、範宴は、山の西塔に一切経蔵を建立した。

(他を見ずに、諸子も、学ばずや)と無言に大衆へ示すように。

無言といえ、彼はまた、黙々として余暇に刀をとって彫った弥陀像と、普賢像の二体とを、彫りあげると、それを、無動寺に住んでいた自身のかたみとして残して、間もなく、東山の聖光院へと身を移した。

東山へ移ってから、彼の不斷の行願は決してやまな。山王神社に七日の参籠をしたのもその頃であるし、山へも時折のぼって、根本中堂の大床に坐して夜を徹したこともたびたびある。

彼が、その前後に最も心のよろこびとしたことは、四天王寺へ詣って、寺蔵の聖徳太子の勝鬘經と法華經とを親しく拝観した一日であった。

太子の御聖業は、いつも、彼の若いころを鞭打つ励みであった。初めて、その御真筆に接した時、範宴は、河内の御靈廟の白い冬の夜を思いだした。

「あなたは、聖徳太子の御遺業に対して、よほど関心をお

もちとみえる。まあ、こちらで御休息なさいませ」そばについて、寺宝を説明してくれた老僧が氣がるに誘うので、奥へ行つて、あいさつをすると、それは四天王寺の住持で良秀僧都という大徳であった。

この人に会ったことだけでも、範宴にとっては、有益な日であつたし、得難い法悦の日であつた。

この年、鎌倉では、頼朝が死んだ。そして、梶原景時は、府を追われて、駿河路で兵に殺された。武門の流転は、激浪のようである。法門の大水は、吐かれずして潑んでいる。

正治二年、少僧都範宴は、東山の山すそに、二十八歳の初春をむかえた。

時雨の罪

一

この春を迎えて、聖光院の門跡として移ってからちよう

ど三年目になる。

門跡という地位もあり、坊官や寺持たちにも待^{まち}かれる身となつて、少僧都範^{はん}宴^{えん}の体は、自^{みづか}ら以前^{いぜん}のように自由なわけにはゆかなくなつた。時には省^{はか}みて、

(この頃は、ちと貴族のような)と聖光院の綺^き羅^らびやかな生活を面映^{おもひかへ}ゆくも思ひ、

(狎^なれてはならぬ)と、美衣美食をおそれ、夜の具^もの温まるを懼^{おそ}れ、經文を口で誦^よむのをおそれ、美塔の中の木乃伊^{み乃伊}となつてしまふことを懼^{おそ}れたが、門跡として見なければならぬ寺務もあり、官務もあり、人との接見もあり、自分の意見だけにうごかせない生活がいつの間にか彼の生活なのであつた。

『お牛車^{うしぐるま}の用意ができました』木幡^{こはたみん}民部^{みんぶ}が手をついて云う。

民部というのは、範^{はん}宴^{えん}が門跡としてきてから抱えられた坊官で、四十六、七の温良な人物だつた。

範^{はん}宴^{えん}は、すでに外出の支度をして、春の光のよく透る居室^{くしつ}の円座に、刃もののように衣紋^{えもん}のよく立っている真新しい法衣^{ほふえ}を着、数珠^{じしゆ}を手^てに、坐^まつていた。

こういう折、朝夕に見る姿でありながら、坊官や待^{まち}たちは、時に、はつとして、

(ああ、端麗^{たんれい}な)思わず眼^めがすくむことがある。

實際、この頃の範^{はん}宴^{えん}は、一頃の苦行慘心に瘦せ衰えていた頃の彼とはちがつて、下頬^{しもほ}膨^{はふ}れにふつくらと肥え、やや中程^{なかつら}で後頭部の大きな円頂^{えんてい}は青々として知識美^{しきび}とでも云いたいような艶^{つや}をたたえ、決して美男という相では在^ありさないが、眉は信念力を濃く描いて、鳳眼^{ほうがん}はほそく、眸^めは強くやさしく、唇^{くち}は丹を嚙^かんでいるかの如く朱い。そして近頃はめつたに外出もせぬせいか、皮膚は手の甲まで女性^{じやうせい}のように白かつた。

だが、ふとい鼻骨と、頑健な頸骨^{けいこつ}が、飽くまで男性的な強い線をひいていた。肩は磐石^{ばんせき}をのせてもめげないと思われ、ゆるやかな幅ひろく斜角線をえがき、立てば、背は五尺五寸のうえに出よう、殊に喉^{のど}の甲狀腺^{こうじょうせん}は、生れたての嬰兒^{あひど}の、拳^{こぶし}ほどもあるかと思われるほど大きい。

この端麗^{たんれい}で、そして威のある姿が、朝の勤行^{ごんぎやう}に、天井のたかい伽藍^{がらん}のなかに立つと、大きな本堂の空虚^{くうこ}もいっぱいになつて見えた。

口きがない末院の納所僧などは、

「御門跡のあの立派さは、どうしても、童貞美というものだろうな」などと囁き合つた。

けれど、師の幼少からかすずいている性善坊は、どうしても、

「だんだん、母御前の吉光さまに生き写しだ」と思えてならない。

ただ、濃い眉、ふとい鼻ばしら、嬰兒の拳大もある喉の悪性の甲状腺——それだけは母のものではない、強いて血液の先をたずねれば、大曾祖父源義家のあらわれかもしれない。

「では、参ろうかの」民部の迎えに、その姿が、今、円座を立て、聖光院の車寄せへ出て行つた。

ちょうど松の内の七日である。範宴は、網代牛車を打たせて、青蓮院の僧正の許へ、これから初春の賀詞をのべにゆこうと思うのであつた。

二

供には、いつものように、性善坊と覚明との二人が、車

脇についてゆく。

牛飼の童子まで、新しい布直垂を着ていた。

慈円僧正の室には、ちょうど、三、四人の公卿が、これも賀詞の客であろう、来あわせていて、

「御門跡がおいでとあらば——」と、あわてて、辞して帰りかけた。慈円はひきとめて、

「御遠慮のいる人物ではない。初春でもあれば、まあ、ゆるりとなされ」と云つた。範宴は、案内について、

「よろしゅうございますか」藪の下から云つた。

「よいとも」僧正は、いつも変らない。

範宴も、ここへ来ては、何かしらくつろいだ気がする。

僧正のまえに出た時に限って、童心というものが幾歳になつても人間にはあることを思う。客の朝臣たちは、

「は……。あなたが、聖光院の御門跡に在すか。お若いのだ」と、おどろきの眼をみはつた。

「おん名は伺っていたが、もう五十にもとどく齡の方であろうと思つていたが」べつな一人も同じような嘆声を発すると、僧正はそばから、

「はははは、まだ、見たとおりな童子でおさる」と云つ

た。

「御門跡をつかまえて、童子とは、おひどうございます」
範宴は、師の房のことばに、何か自分の真の姿をのぞかれたような気がして、

「師の君の仰っしゃる通りです」と、素直に云った。

僧正は、相かわらず和歌の話へ話題をもつて行った。そして、

「初春じゃ、こう顔がそろうては、歌を詠まずにはおれん。範宴も、ちかごろは、ひそかに詠まれるそう。ここに在す客たちも、みな好む道——」と、もう手を鳴らして、硯を、色紙を、文机をといいつける。客の朝臣たちは、

（はて、どうしよう？）というように、当惑そうな眼を見あわせた。そのくせ、青蓮院の歌会には、いつも、席に見える顔であり、四位、藏人、某の子ともあれば、公卿で歌道のたしなみがない人などは殆んどない筈である。何を、眼ませをしているのだろうか。とにかく、しきりと、もじもじして、運ばれてくる色紙や硯などを見ると、さらに、眉をひそめていた。

慈円は、いっこうに、頓着がない。好きな道なので、も

う何やら歌作に他念のない顔である。

「いっそ、申しあげた方が、かえってよくはあるまいか」

「では、其許から」

「いや、おん身から……」何か、低声で囁きあっていた朝臣たちは、やがて思いきったように、

「ちよっと、僧正のお耳へ入れておきたいことがあります」と、云いにくそうにいいだした。

三

「ほ？……何でおざろう」

「実は、この正月には、彼方此方で、僧正のおん身に対して、忌わしい沙汰する者があるのでした」

「世間じゃもの、誰のことでも、毀譽褒貶はありがちじゃ」

「然し、捨てておいては、意外な御災難にならぬとも限りませぬ。僧正には、まだなにもお聞きなさいませぬか」

「知らぬ」と、慈円はこともなげにかぶりを振った。範宴は、側から膝をすすめて、

「お客人」と、呼びかけた。

「師の君の御災難とは心がかり、して、その取沙汰とは

なにを問題にして」

「やはり、和歌のことからです。——この正月、御所の歌会初めに主上から恋という御題が仰せ出されたのです。その時、僧正の詠進されたお歌は、こういうのでありました」と客の朝臣は、低い声に朗詠のふしをつけて、

わが恋は

松をしぐれの

そめかねて

真葛ヶ原に

風さわぐなり

「なるほど……。そして」

「人というものは意外なところへ理窟をつけるもので、僧正のこの歌が、やがて、大宮人や、僧門の人々に、喧ましい問題をまき起す種になろうとは、われ等も、その時は、少しも思いませんでした」

「ほほう」僧正自身が、初耳であつたように、奇異な顔をして、

「なぜじゃろう？」と、つぶやいた。

「さればです」と、べつな朝臣が、後をうけて話した。

「——僧正の秀歌には主上よりも、御感のおことばがあり、女の局や、藏人にいたるまで、さすがは、僧正は風雅なる大遊でおわすなどと、口を極めて云つたものです。ところが、心の狭い一部の納言や沙門たちが、その後になつて、青蓮院の僧正こそは、世をあざむく似非法師じゃ、なぜなれば、なるほど、松を時雨の歌は、秀逸にはちがいないが、恋はおろか、女の肌を知らぬ清浄な君ならば、あんな恋歌が詠み出られる筈はない。必定、青蓮院の僧正は、一生不犯などと、聖めかしてはおわすが、実は、人知れず香を袂に盗んで口を拭く類で、祇園のうかれ女の壻も越えているのだらう、苦々しい限りである、仏法の廃れゆくのも、末法の世といわれるのも、ああいう位階のたかい僧正の行状ですらそうなのだから、まことにやむを得ないことだ、嘆かわしいことだなどと、讒訴の舌を賢げに、寄るとさわると、云い囃しているのです」

範宴は、自分のことでも云われているように、眸を恐くさせて聞いていた。聞き終つてはと息をつきながら、僧正の面が、どんな不快な気しきに塗られているであろうと、そつとみると、慈円は、

『ははは』と、肩をゆすぶって笑うのであった。

四

『妙な批判もあるものじゃな、そんなことを沙汰しおるか』
『中には、僧正を、流罪にせよなどと、役所の門へ、投文した者もあるそうです』

『おどろき入った世の中じゃ、それでは人生に詩も持てぬ。文学も持てぬ。僧が、恋歌を作って悪いなら、万葉や古今のうちの作家をも、破戒僧というて責めずばなるまい』

『然し、僧正の時雨のお歌は、あまりにも、実感がありすぎるというて、女を知らぬ不犯の僧に、かような和歌の作れるわけはないというのです』

『それがおかしい。僧とても、人間じゃ、美しい女性を見れば美しいと思うし、真葛ヶ原の風でのうても、血もさわげば、恋も思う。まして、詩や歌の尊さは、人間としての真を吐露するところにあつて、嘘や、虚飾では、生命がない』そう云つて、慈円は、世評の愚を一笑に附したが、客の朝臣は、

『然し、衆口金^{しゅくぐ}を熔かすということもありますから、ご注意に如くはありません』

『いわしておくがよい。自体、僧じゃから女には目をふさげ、酒杯の側にも坐るなどは、誰がいうた。仏陀も、そうは仰せられん。信心に自信のない僧自身がいうのじゃ。また、僧を金欄の木偶^{きんらん}と思うている俗の人々がいうのじゃ。われらには、自分の信心を信するが故に、左様な窮屈なことは厭う。たとえば、いつであつたか忘れたが、室の津へ、船を寄せ、旅の一夜を、遊女と共に過ごしたこともある。

その折の遊君は、たしか、花漆とかいうて、室の時めいた女性であつたが、津に入る船、出る船の浮世のさまを語り、男ごころ女ごころの人情を聴き、また、花漆の間法にも答えてやり、まことによい一夜であつたと今も思うが、みじんもそれが僧として罪惡であつたとは思へぬ。月は濁池にやどるとも汚れず、心淨ければ、身に塵なしじゃ、そして、娛みなきところにも、娛み得るのが、風流の徳というもの、誹るものには、誹らせておけばよい』
慈円は、筆をとつて、はや、想のできた和歌を、さらさらと書いていた。

朝臣たちも、僧正のことばに感じ入って、歌作の三昧にはいり、いつとはなく、そんな話題もわすれてしまったらしい。

ほどよく、範宴は辞して、聖光院へかえった。然し、きょうの話題は、牛車のうちでも、寝屋のうちでも、妙に胸に蝕い入ってならなかった。

そして、僧正が云われただけの言葉では、まだ社会へ対して、答えきれていない気がするのであった。仏法と女性、僧人と恋愛、それは、決して、一首の和歌の問題ではない。

この数日、範宴はそのことについて、熱病のように考えてばかりいた。解けない提案にぶつかると、その解けきれぬまでは夢寐の間にも忘れ得ないのが彼の常であった。

それから十日ほど後、青蓮院の文使が見えた。

師の僧正からで、頼みの儀があるから来てもらいたいという文面であった。

五

僧正は待っていた、いつもながら明快で、元気である。

訪れた範宴の顔を見ると、

『よう来てくれた。実はちと頼みおきたいことがあって』と、人を遠退けた。

『何事でございますか』範宴は、何となく、青蓮院のうちに、静中の動とでもいうような波濤を感じながら師の眉を見た。

『ほかではないが、ことによると、わしはしばらく遠地へ参るようになるかもしれない。で、留守中のことども、何分、頼みおきたい』

『突然なことをうけたまわります……して何地へ？』

『何地へともまだわからぬが、行くことは確らしい。いつ参るともさしつかえないように、これに、いろいろ覚え書をいたしておいた。後の始末、頼むはお許りほかにない』と、書付を一通、手篋のうちから出して、範宴のまえにおいた。

『かしこまりました』何も問わずに、範宴はそれを襟に秘めた。そして、

『さだめない人の世にござりますれば、仰せのよう、いとお旅立ちあらうも知れず、いつ不慮のお移りあらうも知れ

ず、とにかく、おあずかり申しておきます。どうぞ、いかなる時もお心やすく在あわされませ」と云った。

『うむ』慈円は、自分の心を、鏡にかけて見てとるように覺きざっている範宴のことばに、満足した。

『たのむぞ』

『はい。然しお心ひろく』

『案じるな、わしは、身の在るところに娛もみ得る人間じゃよ、風流の余徳というもの。——いや、風流の罪か、ははは』玄関のほうには、しきりと、訪客の声や、取次の聲音おしおとが客殿との間をかよう。

範宴は、長座ながいを憚はばつて、師の居室いを辞した。そして、廻廊をさがって来ると、

『兄上』見ると弟の尋有じんゆうだった。

尋有は、憂いにみちた顔をしていた。いつもながら病身の弱々しさと、善良で細い神経につかれていた眸めである。

『——もうお帰りますか』

『うむ、近ごろ体は』

『丈夫です』

『それはよい、真心をあげて、御仏みほとけにすがり、僧正に仕え

よ』

『はい。……あの、唯今、師の御房から、どんなお話がありましたか』

『おまえも、心配しているの』

『お案じ申さずにはおられません。わたくしのみでなく、ほかの弟子一統も、お昵懇おひこんの人々も、みな、客殿につめかけて、あのように、毎日、協議しておりますが……』弟のことばに、ふと、そこから院の西の屋やを見やると、なるほど、僧正の身寄だの、和歌の友だの、僧俗雑多な客が、二十人以上も、通夜のように暗い顔をして、ひそひそと語っているのが遠く見えた。

六

尋有は、眼をうるませて、

『あのうちに、師の御房の和歌の御弟子みでし、花山院の若君がいらっしゃいます』

『お、通種卿みちねきやうもおいでか』

『その他の方々も、兄上にお目にかかって、御相談いたしたい儀があると仰せられますが、おもどり下さいません